

<公開研究会>

「縮小しながら発展する」地域の創生

～新たなコミュニティ創りを目指して～

平成27年度 J A 共済総研セミナー（平成28年 3月11日開催）ディスカッション

<パネリスト>

○広井 良典氏：

千葉大学 法政経学部 教授（現・京都大学 こころの未来研究センター 教授）

○西村 周三氏：

年金シニアプラン総合研究機構 理事長、医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 所長、国立社会保障・人口問題研究所 名誉所長

○中沢 新一氏：

明治大学 特任教授、同大学 野生の科学研究所 所長

○内藤 邦男： J A 共済総合研究所 理事長

（司会）川井 真： J A 共済総合研究所 調査研究部 主席研究員

目 次

- | | |
|-------------------------------|---------------------|
| 1. 東日本大震災後の変化 | 4. 「閉じて開く」のバランス |
| 2. 「ファストからスロー」、「クローズドからオープン」に | 5. 新たなコミュニティ創りのありかた |
| 3. 6次産業の定常型社会 | 6. 「国是」より「郡是」に |
| | 7. 1次産業が持つ価値 |

要 旨

日本はこれから超少子高齢・人口減少時代を迎える。私たちは価値観を見直さねばならない時代に生きている。東日本大震災から5年が経ち、若い人の意識が根底から変わりつつあり、日本社会を変えていく方向に向かっている。そうした中、課題はいくつかある。一つは、若い人などを生かす環境や世代間の問題。また、「クローズドからオープンへ」という方向性。そして、「閉じる」「開く」のバランスの取り方も大切だ。

一方で、現在の資本主義はベースの部分で変わらざるを得ないのは間違いない。これから縮小する社会の中では、コミュニティ経済、相互扶助経済が軸になるだろう。6次産業化もそこにつながっている。ヒントは、「郡是」の考え方と「富」の概念にある。何を是とするかを考え、人間世界を超えた大きな循環の世界に接続回路をつくることで、農業は資本主義の新たな方向性を示す一つのモデルとなるだろう。

1. 東日本大震災後の変化

川井真（以下、川井）：ここからは、前半で基調報告¹をされた広井良典先生と西村周三先生のほか、当研究所理事長の内藤邦男、そして中沢新一先生にもご参加いただきます。

中沢先生は、私をご紹介するときにはいつも「人類学者で思想家の」と申し上げています。中沢先生には当研究所の研究パートナーとしてご指導いただいております。もう長いお付き合いですが、中沢先生のごことがだんだん「物理学者であり、数学者であり、宗教学者でもある」と思えてきます。お話をしていると、専門領域がかなり深く広がっていきまので、ご紹介するときに、狭い型にはめてしまうのが心苦しくなってくるわけです。それで、そうした形にとらわれないように、このようなご紹介の仕方をさせていただくようにしています。

さて、東日本大震災から今日でちょうど5年が過ぎました。中沢先生は震災直後に『日本の大転換』²という本を出版されましたが、拝読してそのときに思ったのです。「あ、これで日本は変わる。いや、変わらなければいけない」と。

ところがあれから5年が経過し、改めて振り返ってみるとき「日本は進むべき道にまだ迷いがあり、足踏みを繰り返しているような状況にあるのではないか」と思います。

なおかつ、まさにこのディスカッション、そして今回のセミナーのテーマにも通じますが、これから日本は超少子高齢・人口減少時代を迎えます。あえて「時代」と申し上げましたのは、一過性のものではないからです。そうした時代にこれから入っていきます。毎



中沢新一氏

年約100万人規模で日本人の人口が減っていくような時代が始まるのです。

また、その背景には、西村先生が先ほどお話ししてくださったように、高齢化を伴います。だとすれば、私たちは自分たちの生き方や働き方、産業を含めて、自分たちの頭の中を支配している思考、価値観を見直していかなければならない時代を生きているということを考えていかなければいけない、大きな問題だと思えます。

中沢新一（以下、中沢）：3・11から5年経って「日本が元に戻った」という印象を受けるという話がありましたが、実際のところは、根底のところはたいへん変わってしまっています。変わっていないように見えるのは、変えたくないという人たちが声を強くして、「変えたくない」「今までの価値と同じように進めたい」と言っているからです。マスコミなどでも、そのようなことが非常に強く言われています。その印象によって、私たちは「日本は元に戻ってしまったのか」という印象を受けるのです。ただ、実際に地方に行ってみたり、特に若い人たちの考

1 本誌No.144（2016年4月発行）に広井報告（2～11ページ）と西村報告（12～21ページ）を掲載。

2 中沢新一『日本の大転換』集英社（集英社新書）2011年

え方を聞いてみると、「もう根底から変わってしまっている」という印象を強く受けません。

どのような方向に変わっているかと言うと、まさに先ほど、広井先生と西村先生がお話しいただいた方向に確実に踏み込んで変わってしまっていて、ある部分においては「ちょっともうこれは引き返さないだろうな」というくらいの変化が生じてきています。マスコミなどで語られる言葉だけを鵜呑みにせず、実際に東京や大阪以外の日本の各地で活動している人たちの考え方を聞いてみると、ある部分は根底的に変わっているという印象を受けるのです。

広井先生のお話を聞いていて、僕は20年前を思い出しました。僕が中央大学に初めて大学の教員として就職したとき、総合政策学部という新しい学部が立ち上がりました。そのころは、今、社会の表面に知的な体系として現れ始めているようなものが萌芽のようにしてあったときで、それをまとめようとするのが総合政策学部のビジョンでした。

医療の問題や、経済システムをどの方向に変えていかなければいけないのかという問題も、20年前には萌芽のような状態でした。さらに、今日の話を知っていると、もう一つの大きい物語というか、システムをつくり始めています。これを、さまざまな表面で起こっている変化の揺り戻しとか、反対方向に動くとかということだけで捉えていると、日本の社会の深い部分で起こっている変化をつかめないという印象を受けました。

確かに5年前と比べて、ある人々は着実に変わってしまっています。それをキャッチしていくことが大切です。その人たちの考え方の変化している方向は、おそらく今後10年、15年、20年と、日本の社会を徐々に変えてい

く方向に向かっていく主流となるものだと思いますので、私はそんなに悲観していません。

川井：ありがとうございます。中沢先生とは常々、日本のこれからについてお話もしていますが、具体的にご意見を聞いたのは初めてですので、私にとっては少し励まされる思いになりました。

ただ、正直に言いまして、私も地域に入っただけでさまざまな人たちの声を聞き、全体としてそうした雰囲気を感じる一方で、まだ何か大きな圧力のようなもの、動きを封じ込めているような強い圧力のようなものを、皆さんが感じながら生きているような雰囲気も感じられるときがあります。その点について、中沢先生はどのようにお考えでしょうか。

中沢：それは僕が自分の人生でずっと感じ続けていることです。どの共同体、どの社会に行っても、その圧力は常に働いています。ただ日本の場合、地域差が非常に大きくて、その圧力が非常に強いところや、ちょっとかさぶたが取れてしまっているようなところなどもいくつか出始めています。僕が川井さんと一緒に歩いている場所では、圧力が少し外れかかっているところが多いと思います。

そうした場所で中心になっているのは僕らの世代ですが、話をしていると、こちらの考え方と相手の考え方が即座にツーカーになっていく場所がいくつかあります。逆に、話がまったく通用しない場所もあります。僕は山梨県民ですが、地元にいると、話を通じないという体験がものすごく多いです。一方、たとえば、三重県や東北の人たちと話をしていると、「これはもう、自分たちは変わらざるを得ない」というところに押し出されてしまっていて、圧力どころではなくなっているというところがあります。

この圧力がいつまで続くか。今、この圧力

はアベノミクスやさまざまな問題とも連動しながら動いていますが、おそらくは変化の兆しは見えるのではないのでしょうか。

2. 「ファストからスロー」、 「クローズドからオープン」に

川井：さて、先ほど広井先生から学生のお話がいくつか出てきました。新しいものに気がついて一歩踏み出そう、あるいは、言葉にはしづらいいけれども何かを自分で感じ取って「今の方向はちょっと違うから、自分は違った生き方をしよう」という学生や子どもたちが増えてきているような感じがします。今の問題と絡めて、何かご意見をいただけますか。

広井良典（以下、広井）：私も中沢先生のご発言に、かなり勇気づけられたというか、希望を感じました。

現在の日本社会ほど、それぞれの世代で生きてきた時代が違う社会というのは珍しいのではないかと思います。ある意味で世代差が非常に大きいと思うのです。欠乏や貧困を身をもって体験した高齢の世代もいれば、戦争も含めて高度成長期の真ただ中を走ってきた世代、それから今おっしゃったような世代です。

ちなみに私は、就職した頃、今では死語になっていますが「新人類」と言われていました。会社の仕事よりプライベートを優先するなど、過渡期の入り口だったと思いますが、今はまたさらに進化しています。

つまり何を言いたいかというと、生きてきた時代が非常に違うので、世代による価値観がかなり違って、一方では、アベノミクス的な高度成長期の成功体験が染みついている、良くも悪くも「ジャパン・アズ・ナンバーワンと言われた頃の感じでやっていけばうまくいくのだ」と強く思っている世代の人た



広井良典氏

ちが、わりとまだ力を持っています。

かたや若い世代は、高度成長期の成功体験とはまったく違う時代を生きてきていて、かなり違った思考を持っています。現在はある意味で非常に大きな過渡期で、言い換えるとせめぎ合いの時代のような状況であるのではないかと思います。

ただこれに関しては、時代の構造として変わっていかざるを得ないのではないかと思います。高度成長期的なパラダイム、世界観から、私は「定常」という言葉をよく使うのですが、そのような方向に変わらざるを得ません。言い換えれば「ファストからスロー」。この移行は、私は確実に進んでいくと思います。

さらに言えば、ご存知の方も多いかと思いますが、江戸時代の終わりから明治の初めに日本を訪れた外国人は、口をそろえて「これほどのんびりした、働こうとしない人々を見たことがない」と言いました。ですから、「日本人が勤勉だ」というのも時代の産物です。勤勉さ自体はいいことなのですが、それで過労死するようなことは高度成長期の産物であって、そこがファスト的なものからスローへと変わっていくのではないのでしょうか。

もう一つ、私が危惧しているのは、クローズドとオープンという軸に関することです。

「クローズドからオープン」という方向が日本社会にとっては最大の課題ではないかと思うのです。良くも悪くも日本社会の特徴は、稲作の遺伝子というか、ややもすれば共同体ごとに完結するようなところがあります。共同体を超えた開かれた関係性のような、個人としてつながるといふ「クローズドからオープン」が、「ファストからスロー」と並ぶもう一つの大きな課題ではないかと思っています。

今、若い世代の動きを見てみると、さまざま新しい共同体、コミュニティとコミュニティをつなぐような動きも出てきているようですので、希望を持っています。

川井：ありがとうございます。私の好きな本で、渡辺京二さんの『逝きし世の面影』という本³があります。その中で、江戸末期から明治初期にかけて海外から日本を訪れた外国人たちの日本への感想がいろいろ述べられています。若干美化しているところがあったとしても、その本に書かれていることは、おそらく純粋に感じた言葉が相当含まれているのだらうと思います。

広井先生は基調講演で、平安時代からの人口の長期的トレンドのデータをお示しくださいましたが、江戸時代は定常型社会ですか？

広井：農業を基盤とする定常型社会です。

3. 6次産業の定常型社会

川井：先ほどの講演で西村先生が終盤におっしゃっていましたが、柔軟な働き方を可能にする産業構造としての「6次産業」を、これからどういった構図にデザインしていけばいいのかということは、すごく重要な問いです。

定常型社会に何か大きなヒントがあるように感じますが、西村先生いかがでしょうか。

西村周三（以下、西村）：まだ問題提起の段階で、少し間違っただけを言うかもしれないということを覚悟の上で聞いていただければ、と思います（笑）。

広井先生もおっしゃいましたが、昔の一所懸命の時代は、「勤勉」ということが間違いなく日本の社会にとって大事な価値観だったと思います。「三方良し」の社会もそうです。ただ、今の3次産業のやり方を考えると、朝出勤して、パソコンに向かってゲームソフトを夕方まで一所懸命開発して、勤務時間を終えて帰るのでは、何も新しいソフトは生まれないという印象があります。ですから、思い切って働き方を変えることが、私は一つのキーワードだと思っています。

たとえば、先ほども少し申し上げましたが、1次産業の働き方、2次産業の働き方、3次産業の働き方は、相当違います。

答えはだいたい予想していますが、あえて広井先生にチャレンジして反論します。「大学を卒業して就職する場所として地方を選ぶという傾向がある」ということでした。私があえて反論すると、若い人はそう思っているでしょうが、その若い人を地方の人が従来の発想で同じように働かせようとすると、長続きしないと思います。それは、自由な仕事の体系をどう構築するかの問題です。

やはり人口減少社会というのはけっこう深刻なのです。どうしてかと言うと、団塊の世代が数で勝負して、自分たちの昔の高度成長の発想を未だに叩き込んだまま、若い人に「同じことをやれ」と言うようなことをやりかねないからです。わかりやすく言うと、8時半

3 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社（平凡社ライブラリー）2005年

勤務に遅れてきたら、「おまえはけしからん」というような対応はもう違うのです。「遅れてきてもいいけれども、その代わり、その分、何かきちんと成果を出せよ」というような発想に変えないといけません。

昔の勤勉とは何でしょうか。最近の学校では、二宮金次郎さんの背中に薪を背負いながら道を歩くというのは、危険だからよくないという話が盛んになっているようです。

いろいろな意味でまだ茫漠としているのですが、たとえば具体的にそうした一つの問題を取り上げて、これからの新しい時代について、「勤勉って何だろう」というように考えてみる。そのようにいろいろ独自の発想をしながら考えていくことです。地方で活性化しているところは、たとえば定年制がない企業がかなりあるなどいろいろユニークな事例があります。特に、若い人に自由闊達に働いてもらう社会、あるいは地域をどのようにつくるかということは、一つの課題ではないかと思えます。

川井：ありがとうございます。今のお話の問題は、最初の中沢先生のお話の中で、新しい動きに対してブレーキや圧力をかけるようなものも存在すると言われたものと、若干つながるところがあるのでしょうか。

中沢：人間は、若いときに叩き込まれた価値観がけっこう持続するので、高度成長期・青春期に叩き込まれた価値観はずっと持続する傾向があると思います。また、年を取ってから、自分が大事だと思っていた価値観を、若い世代から無下に否定されるのは非常に腹立たしいことでもあります。それは自分でもよく体験することです。しかしそれは、ある時代の一時の幻想を自分の中に刷り込んでいるだけなのだと思うようにしています。

社会全体からみると時間差は必ずあります



西村周三氏

から、世代ごとの軋轢はずっと存在しています。エジプトのピラミッドに書いてあった有名な落書きがありますね。「最近の若者はなっていない」。古代のエジプト人でさえそうだったわけです。考えてみると、エジプトよりもっと前からそうだったと思います。社会がもっと安定していて、世代ごとの価値がそんなに流動化していない社会であったとしても、エジプトは当時も都市で、都市では必ず流動化が起きているから、それが発生しています。そして、今の状態でもそうなっています。ですから、圧力があったり、それを押し戻そうとしたりする力の揺り戻しというのは、常に存在しています。

ただ、社会全体が変わっていく方向性は、それとはまた違うのです。ある世代の人がこう思っていたとしても、社会はそうに進みません。これからの社会がどちらの方向に確実に進んでいくかということ、必ず、縮小していく社会に向かって行かざるを得ません。そうなったときは、その人が自分の価値観でこう思っているようがいまいが、そんなことは関わりなく、社会・世界はある一定方向に変化していくことになると思います。

その一定方向の変化の先には、現在の資本

主義が、かなりベースの部分で変わらざるを得ない局面になります。今はそれが見えない状態ですが、それが可視化されて見える状態が現れると思います。人間の世界ではそれが突如現れるのです。

先ほど「一所懸命」という言葉が出てきましたが、その言葉だって、鎌倉の武士たちがワーッと登場してきて、そのときに初めて言語化され、可視化されたのです。それまでは日本人の中に「一所懸命」という考え方はありませんでした。「一所懸命」というのは、要するに「一つの場所で命をかけ、一つの主の下に命をかける」ということですが、以前はそのような考え方がなかったのです。ただ、時代の大きな流れの中で、封建制に向かっていったとき、そうしたものが蓄積されていきました。ですから、みんなにはそれが見えないのです。

ところが、ある日突然、可視化されて現れる。そうすると、変化が急速に波及してくるという現象が起こるのだと思います。今の資本主義のシステム自体はいろいろ問題を抱えていて、それをどちらの方向に変えていくのか、まだよくわからないのです。ただ、今まで「よし」とされ、前提とされていたことが、もう前提にはならないだろうということだけは間違いないと思います。

川井：それは、先ほど触れた東日本大震災を機に大きく変わり始めた動きは、「世代間の中での食い違いを貫くもの」「その世代に関係しないもの」ととらえてよいわけですね。

中沢：はい。たとえば西村先生よりずっと保守的な若者は大勢いますから、世代は関係ないと思います。ただ、世界全体が大きく動いていることは間違いありません。今は、それをいち早く言語化して目に見える形にできるかどうかという「臨界点」に本当にきていま

す。これはまだ誰も成功していません。

川井：今、お名前が出ましたが、西村先生は今の資本主義の動きに、ある程度の矯正・修正をしていかなければいけないというお話だったかと思います。経済学者としての西村先生から見て、今の現実、産業・経済のあり方はどうでしょうか。

西村：ちょっと不安にさせるかもしれない話をします。結論から言うと、これから日本の社会は交易プレッシャーから解放されるべきです。これは若干、広井批判に聞こえるかもしれませんが、何か外から入れてもっと農業生産物を輸出しろということに反対ではありませんが、モノが出て行くときは同時に人も出て行かないといけません。

これは、お二方とも知っているマルクスが言っている話なので、「お前、いい加減なことを言うな」と言われるかもしれませんが、モノの出入りと人の出入りがバランスを取っていかないとはいけません。単にモノがたくさん入ってきたらいいとか悪いとか、出て行ったらいいとか悪いとか、そうした時代ではなくなってきています。

ただ、実は経済学ではずっとそのように教えてきました。交易の利益、比較優位などをいろいろ教えてきたのです。これが今、大きく変わってきています。中沢さんがおっしゃる一つのポイントは、まさにそういうところではないかと思います。

しかし、かといって、閉鎖的であっていいかどうかは別で、違うと思います。やはり人が出たり入ったりするのです。今、中国の方がたくさん来られています。これも中国との今後の交流の大事な一つのきっかけであって、人が出入りするのです。「では、IS (Islamic State) とも出入りするのか」と問われたら非常に難しい問題ですが、その意味

でも資本主義の大きな転換期が来ています。講演では時間の関係でポラーニ⁴の話を紹介できませんでしたが、そのような発想が大事ではないかと思っています。

4. 「閉じて開く」のバランス

(1) 「対馬」というフィールドで学んだこと

川井：柔軟性と流動性のある社会という意味でもあるのでしょうか。中沢先生と当研究所とが進めている研究フィールドに、国境離島の長崎県対馬市があります。実際、そこの人たちの暮らしぶりを見てみると、半農半漁で1次産業が優位です。ただ、歴史的に見ても、過去からずっとその経済を支えていたのは、隣の国との流れでつながっているのです。江戸時代もそうですが、あのまちを眺めてみると、私は非常に柔軟で流動的だと思うのです。そのあたりについて、中沢先生からひと言をお願いします。

中沢：僕は、実際に対馬に行って人と付き合いながら調査などをする前は、隣の国、韓国の影響をかなり受けてしまっているのだろうと思っていました。現在の観光客の数にしても、釜山^{フサン}から来る観光客が約19万人です。日本から行っている観光客は2万人とか3万人でしょう。その数字だけ見ると、「えっ？」という印象でした。文化はまさに日本の文化そのもので、むしろ本土や九州に残っている文化以上に原型的な日本文化だからです。メンタリティにおいても同様で、「対馬は朝鮮半島と大陸に向かって開いているけれども、根底においては閉じているのだな」と、たいへん強い印象を受けました。

世界中の成功している観光地は、たいがい

ものすごく自分を閉じています。一番すごいと思ったのはバリ島です。バリ島の人たちは、外国人・観光客・ツーリストに対して、ものすごく愛想がいいのです。自分たちの文化も、「はい、見てください、見てください」とやっているけれども、自分たちのプライベートな生活あるいはコミュニティ生活に関わると、一切入れません。見せる部分は平気で見せているのですが、根底の部分は見せないようにしています。

この「閉じて開く」というのが、これからの日本のあり方にとって非常に大事です。今は、とにかく「開いて、労働力を外国から取り入れろ」「農業は打って出ろ」と言っていますが、どんどん「開け、開け」としているのですが、これは同時に、「閉じる」というもののバランスを取りながらやっていかなければいけないという印象を強く受けます。

特に日本は海洋国ですから、自然条件としては、長期にわたって閉じていることが可能でした。同時に、周りがすべて海であるということは、全部開いているという意味でもあって、日本人のメンタリティの根底には、「閉じる」「開く」というのが、ある種のバランスを取ってできていたと思います。

江戸時代の定常型社会は、この「開く」と「閉じる」のバランスをかなり意識的にコントロールできていたと思います。明治時代も実は、わりあいコントロールが効いていました。和魂洋才という言い方がしきりになされましたが、あれも「和魂」で閉じて「洋才」で開くというやり方で、単なる実利主義のように見えますがそうではないのです。この海洋国家で島国である日本が健康に豊かに育つ

4 Karl Polanyi (1886~1964) 経済人類学の創始者。オーストリア・ウィーン生まれ。ブダペスト、ロンドン、アメリカ、カナダにも居住。「ハンガリー革命」で連合政権法相、ウィーンで総合誌編集主幹、オックスフォード大学・ロンドン大学で講師などを歴任。主な著作に『大転換』、『経済の文明史』など。

ていくためには、「閉じて開く」のバランスが必要だという認識が常に存在していました。

今、たとえばTPPの議論で、開くのか閉じるのかという非常に極端な議論が一気に湧き上がって展開しましたが、実際には完全に閉じることもできないし、完全に開くこともできない。完全に開いたときに何が起こるかという、現在のヨーロッパの状態がヒントになります。ヨーロッパ域内で開いただけですら、今日のような状態がもたらされていて、EU経済はシステムとしてあと10年もつかどうかわかりません。

日本人が自分でどのようなメンタリティをつくっていかねばいけないかということにおいて、「閉じて開く」というバランスと運動がものすごく大事なのだろうというのが、対馬へ行った僕の実感です。

(2) 「縄文と弥生」

川井：中沢先生のお話は、先ほど広井先生がおっしゃった、オープンとクローズドの問題とまさに合致してきますが、広井先生、よろしいでしょうか。

広井：今の中沢先生の「閉じて開く」というお話は、今日の一つの大きな中心的なテーマになると思います。これはある意味でコミュニティ論の永遠のテーマのような面でもあると思いますが、一つ注意する必要があるのは、外面的に海外に出たら開いていて、ローカルに過ごしていたら閉じている、という話ではないだろうということです。

わかりやすい例では、地域でローカルな自然エネルギーに取り組んでいる若者の意識は、行動はローカルにやっているけれども、ある意味で意識は非常に開いていると思います。逆に、高度成長期の商社マンの例を考えると、海外にはどんどん行っているけれども、

背負っているのは「日本丸」のような感じで、意識はけっこう閉じていたりします。ですから、貿易をしていたり海外にたくさん行っていたら開いていて、ローカルに根ざしてやっていたら閉じているということではけっしてありません。まず、ここは押さえておく必要があると思います。

それを踏まえた上で、「閉じて開く」というのは、特に日本人にとって永遠のテーマとも言えると思います。一方で、基調講演の中でもローカルな経済循環と言いつつ、他方で共同体を開いていく必要があるという、一見矛盾することをお話したかと思いません。

私から見ると、日本社会はともすれば閉じていく「稲作の遺伝子」、稲作の2000年の歴史から出てきたある種の行動パターンのようなものがあります。かたや、これは中沢先生に伺いたいところですが、縄文と弥生という話にもなってくるかと思えます。西村先生もおっしゃっていましたが、狩猟採集、漁業など多様な形態も持っているので、一概にそうと言えないものもあります。

結局、人間というのは「閉じると開く」、言い換えると「農村と都市」と言ってもいいかと思えますし、「縄文と弥生」と言ってもいいかと思えます。それら両方が必要で、そのあたりをどのように回復していくかというところが、一つの中心テーマでもあるのではないかと考えています。

川井：縄文と弥生と出てしまったら、聞かないわけにいきません。中沢先生、ひと言よろしいでしょうか。

中沢：日本史、ことに戦後の歴史は、つくられてしまったイメージがものすごく大きいと思います。弥生というのは農業社会で内側に集約して、縄文の狩猟社会は流動的、

狩猟採集は移動していくのだというイメージが徹底的につくられているのですが、これはほとんど現実にそぐわない考え方です。

まず、縄文人というのは定住社会です。最初は、日本列島に海から入ってきているのです。北からは陸地を伝わって入っていて、狩猟社会ではありますが、定住なのです。そして、畑をつくっています。この畑はかなり組織的につくられています。縄文の初期の社会というのは、粟畑をきちんとつくっていて、芋の栽培もきちんとやっているのです。

地球上のいわゆる狩猟採集民族というのは、いつもバンドをつくって移動していたとイメージされて、「その人たちは自然に加工はしなかった」と言われていますが、「どうもその考えは間違っているようだ」というのが、最近の人類学の研究です。たとえば、「アマゾンのジャングルで人間の手の入っていない場所はどこにもない」と言われています。つまり、インディオがジャングルを自分たちの畑として作り替えてきた長い歴史があるということなのです。

日本の縄文社会などは、それ以上にもっと高度な新石器社会ですから、定住しているのです。ただ問題は、田んぼをつくるかつからないか、これが重大な問題だったのです。田んぼをつくるためには、まず地面をならさないといけない、水利をつくらなければいけないなど、集約的な作業が必要だからです。狩猟の場合は数人で森へ入ればよかったのですが、今度は共同作業が必要になってくるところが、米づくりの重大な問題です。

米づくり社会になると弥生と呼ばれるようになるわけですが、弥生文化を持ってきた人たちを見ても、定住している人たちでは

ありません。日本に稲作を持ってきた人たちはほぼ確定していて、中国の揚子江河口部、^{きつこう}浙江省のあたりにいた倭人と呼ばれる人たちが北上してきて、九州の北部に入ってそこで稲作を始めたというのが、だいたいの定説になっています。

浙江省にいたときは何をやっていたかというところ、半農半漁です。揚子江河口部は世界初の大規模稲作が成功した場所ですから、その稲作を取り入れました。しかも倭人は潜水漁法、海女をしていました。要するに、漁業もやれば農業もやるという人たちが北上して日本に入ってきているわけです。

ですから、縄文人と弥生人はそれほど違わなかったのではないかと。そうでないと、価値観がこれほど違っていたら、絶対、戦争が起こっているはずで。ところがその痕跡はほとんどありません。ことに初期の倭人が稲作を持ってきたとき、九州、現在の櫛田神社あたり、博多祇園山笠をやっているあたりが中心ですが、あそこで縄文の人たちが一緒になってやっています。しかもそのとき、八戸の縄文村の青年団が稲作を見にきているのです。そして、失敗していますが、八戸に稲作を持って行っています。つまり、稲作が始まったというニュースが日本列島を駆け巡り、縄文人がたいへん関心を持った。この縄文人にもさまざまなタイプがいて、関心を持つ八戸のような先進的グループがいる一方で、北陸の人たちはかなり頑強に抵抗しました。あるいは東北内陸部、秋田や岩手の内陸部、山形の内陸部の人たちも頑強に抵抗していて、そうした大きな流れの中で日本列島と日本人は徐々に徐々に変わっていきました。その初期の段階を見ると、弥生と縄文というのは、今まで言われていたような話ではないと思います。

岡本太郎さん⁵が「縄文」と言ったのは、ほとんどフィクションだと思います。縄文の人だって、あんなに野性的でパワフルな人たちばかりではありません。気弱な人もひ弱な人もいたと思います。ほとんど違いはないと見たほうがいいのではないのでしょうか。

ただ重大なのは、稲作と、中国にいた人たちが「国家」というものを知っていたということです。国というものを知っていた人たちが九州北部へ入ってきて、それが日本列島に広がっていったわけですが、縄文の人たちで一番重要なのは、稲作をしない。そして国家を持たない。この2つが大きな違いでした。

日本の農村が、今のような形になってくるのは室町時代の後だと言われているくらいです。農村は一度、班田収授法のような古代システムの中で租庸調システムがつくられますが、あれは一旦チャラになります。チャラになったところで、日本の村というものがつくられ始め、室町時代で「惣村」というものがつくられるようになるわけです。

これが今の農村の原型になっています。惣村は閉じて開いています。惣村では、いろいろ分散していた村を1つにまとめていく組織ができて、共同作業もできるようになりました。すでに貨幣経済も入っています。そして、そこに神社がつくられました。氏神の重要な神社が、各村に一つずつつくられていきます。

そこには「座」⁶というものもつくられて、この座が「講」⁷の元になっていきます。講の中に入った人間は平等になります。平等に

なって、相互扶助経済が運用されるようになります。座と講というのは非常に重要なものとしてつくられていきました。その意味では、稲作を行ったときに何が本当の変化として起こったかというのは、実はまだあまり解明され尽くされていないと思います。

5. 新たなコミュニティ創りのありかた

(1) 若者たちの意識の変化と6次産業

川井：ありがとうございます。職の問題からコミュニティ、特にオープン・クローズドというキーワードが出てきて、縄文・弥生まで話がさかのぼりました。こう考えてみると、日本人というのは、そもそもコミュニティづくりが上手なわりに、開かれた民族であったというイメージがすごく強くなります。

中沢先生が最後におっしゃったように、稲作から来る細かい発祥の流れのようなものは、まだよくわかっていない部分もあるというお話がありました。内藤理事長はずっと農林水産行政の現場にいてさまざまなものを見てこられたと思いますが、そういった見地から見て、全体の流れの中でひと言ご意見いただければと思います。

内藤邦男（以下、内藤）：少し前の、若い人の意識についての話に戻してフォローさせていただきたいと思います。

私は3年くらい前に10人くらいの20代の若い人たちを引き連れて、20日間、ラオスに行ってきました。20代の人たちがいったい何を考え何をしているのか、久しぶりに間近で見

5 岡本太郎（1911～1996）芸術家。大阪万博（1970年開催）のシンボルとなった『太陽の塔』、CMのコピー「芸術は爆発だ」などで知られる。縄文土器について触れた著作は『日本の伝統 岡本太郎の本；2』みすず書房1999年、など。

6 平安時代末期から戦国時代、朝廷・貴族・大社寺・武家（室町時代・戦国大名等）などに従属する諸身分において、奉仕・貢納を行う代償として与えられた特権をもとに、営業活動を行った商工業者、芸能者、交通運輸業者などの職能者の集団。（『国史大辞典』）

7 宗教・経済・社交場の目的を達成するために組まれた結衆集団で、〇〇講の名を付けて呼ばれる。（『国史大辞典』）

ましたが、やはり外に対する関心、好奇心は非常に旺盛です。ただ、表現力の部分、それをどう表現しているのかわからないというのが彼ら彼女らの正直な姿と思いました。

一方、ラオスの首都ビエンチャンの大学生といろいろと話をしていくと、彼らは国内で超エリートですから、意識が非常に高く、それに触発されるところは非常に多かったと思います。今の日本の若い人も、おそらくそうした機会を与えられれば意識は急激に高まっていくだろうし、^{はば}市も広がっていくと思います。残念ながら、現実にはそうした機会がなかなかないのではないかと、そのときに感じました。

また、2年ほど前に、10人ほどの20歳くらいの学生が「農業を勉強したい」ということでいろいろな大学から来て、私が先生となって何回か勉強会をしました。そのときも彼らの意識は非常に高く、しかもボランティアをしながら、なおかつそれをビジネスにしたいという意欲がけっこう強かったわけです。

ビジネスにするにはアイデアが未熟なところもありましたが、「変えたい」「何かをしたい」「何かをやってみて、それをビジネスとして立ち上げていきたい」という意識がありました。そのときに私が思ったのは、彼らのやりたいビジネスというのは、大してお金がかからず、「20万円でも30万円でもいい」「100万円あれば十分」だということです。また、そうした若い人の、未熟かもしれないけれども「やりたい」というビジネスを支援するような仕掛けがなかなかない、ということにも気づきました。そうしたものを試行錯誤していけば、そこからベンチャーやイノベーション、おそらくプロセスのイノベーションなどが出てくるのではないのでしょうか。



内藤邦男理事長

若い人は意識が変わってきています。若い人がいろいろなアイデアを持っていることも確かです。ただ、それを生かす環境、生かしてあげる環境というものは、まだまだ少ないのかもしれませんが、それをつくってあげることが、若い世代に元気が出て、生産年齢を超えた、今後増大する多くの高齢層を支えることになるのではないのでしょうか。

それから、確かに生産年齢人口は減っていますが、それだけを言ってみても仕方ありません。増えていく高齢者、生産年齢を超えた人たちを、サービスを受けると同時に、サービスを提供する層に変えていけば、別の局面になります。単に公的保障や財政資金を投入するだけではなく、彼らとその財政負担を一部肩代わりすることになると思います。

その意味では、西村先生のおっしゃるような、社会全体で支えるようなシステムをつくってあげればいいので、そこに若い人のアイデアも入って来る余地があるのではないのでしょうか。ですから、若い人の発想を生かしつつ、生産年齢を超えた人たちもサービス提供できるという仕掛けを、どのように早急につくっていくかが大きな課題ではないかと思います。

川井：そのテーマが入っていないければいけま

せんね。今の内藤理事長のコメントからも察しがつくように、西村先生の6次産業のお話でも、1次産業がなければどうしようもないわけです。そして、1次産業はコミュニティに入っていかなければなりません。先ほどもお話がありましたが、コミュニティの中に入って新たに働きたいという人を受け入れるには、意外にハードルが高いという話もあります。ラオスの話もそうですが、おそらく同じような思考の中で交流できるような「外へ開ける窓口」を、今の若い人たちはたくさん持っているのではないかと気がします。

また、高齢者福祉と農業の相性の良さというのを改めて感じてきます。さらに、時間に縛られない働き方の中で、何となく生きがいと密接したような生産行動というのも、1次産業から見い出せるという思いがあります。

本日のテーマ「新たなコミュニティ創り」というところに、すべて帰結してくるということが、今のお話を聞いて改めて感じているところです。それを踏まえて、農業、コミュニティ、新しい働き方、若者といったキーワードで、これまでの全体の流れから、広井先生からひと言いただければと存じます。

広井：今、いろいろな論点がだんだん結びついてきている感じです。前半での働き方や西村先生の6次産業、オープン・クローズドの話、資本主義の話も出てきて、先ほどオープン・クローズドともつながる中沢先生の縄文・弥生や相互扶助経済の話があり、若い世代のソーシャルビジネスや高齢者も巻き込んでという話。それぞれが全部つながってくるようなイメージがあります。

私としては、自分の中でも熟していない模索中のテーマですが、講演の中で少し申しましたコミュニティ経済、言い換えると相互扶助経済でもあるのですが、このあたりが一つ

のポイントになってくるのではないかと思います。コミュニティ経済というのは、たとえば高齢者をコミュニティの中に包摂していくと同時に、高齢者自身も積極的に参加して、若い世代にいろいろなことを教えたりします。それでまた経済、ヒト・モノ・カネが循環していくというイメージです。コミュニティと経済が融合して、そこに広い意味で雇用なども生まれてきます。それは相互扶助経済で、中沢先生のお話にもあったように、実は日本が元々しっかりと持っていたものです。

さらに話を広げると、本日の主要なテーマである、資本主義と縮小する社会、あるいは定常する社会というのは果たして両立可能なのかという、最も基本的な課題があると思います。そうした大きなレベルで言うと、これから拡大しない資本主義システムのようなことがあるとすれば、相互扶助経済、さまざまな世代が参加するコミュニティ経済のようなものが、おそらく一つの軸になってきます。

6次産業の話もそれにつながると思います。これは問題提起というか、お伺いしたいテーマですが、実は今の1次・2次・3次という産業分類自体が、工業化時代にでき上がったもので、農業を中心とする社会においては、元々1次・2次・3次も全部融合していました。コミュニティの中のケア、相互扶助、生産なども、元々全部1次・2次・3次が融合していて、それが分かれていったのが工業化時代、近代です。それがもう一度、再融合しているのが現状ではないでしょうか。

ですから6次産業化というのは、ある意味で「懐かしい未来」という言い方もありますが、わりと回帰のような面があり、大きく言うと、それがコミュニティ経済の話ともつながり、資本主義の新たな形ともつながって、全部連動するのではないかと感じました。

(2) 家族・私有財産とコミュニティの形成

川井：今の広井先生のお話で、「成長しなければならない」ではなく、「結果としての成長とは何なのか」という議論に結びついてくるのではないかと感じましたが、西村先生、いかがでしょうか。

西村：おっしゃるとおりです。その前に広井さんがおっしゃった1次・2次・3次産業については、私は注意深く「ペティの定義後に拡大したものが多く」云々と講演資料の脚注に書いておきましたが、おっしゃるとおり、すでに1次・2次・3次の分類は陳腐化しています。特に一番大きいのは3次でしょう。3次に雑多なものがいろいろと入っていますので、分類を誰か新しい発想で、というご指摘には本当に賛成です。

さて話を戻しますと、川井さんのご質問に関して、また問題提起をしたいと思います。話題が飛んで恐縮ですが、私が先ほど強調した点は、昔、エンゲルス⁸が『家族・私有財産・国家の起源』⁹という本を書いています。やはり「家族」なのです。「家族」というのは、今のキーワードでもあるのです。コミュニティはつくりたいし、コミュニティ機能をどう回復するかということはとても大事な話なのですが、誤解を恐れずあえて極論をすると、家族がコミュニティの形成を妨げているという面があるような気がします。これは中沢先生にお伺いしたいのですが、「私有財産としての農地がそれぞれの家族の私有財産として確立したのはいつ頃か」というような話からさかのぼって、私たちはもっと知恵を得たいと思います。

なぜかという、先ほど少しお話ししたよ

うに、私有財産は本当に移ろいやすいものだからです。都心もそうです。最も古い私有財産争いというのは、農地や土地を巡る争いでした。私は農家の生まれではありませんので、その問題の重要性はわかっていません。ただ、土地を私有財産権として確定したり、いろいろやるのはいいけれども、それを近所の人と一緒に使うというような革新はどうやればできるのでしょうか。

先ほどお話ししました6次産業という提案は、大規模化の提案ではありません。農地を大規模化するというのは、私はあまり好きではありません。とはいうものの、現状、近所同士が助け合って、さまざまな行事などをきちんと継承しているのでしょうか。要するに、私有財産があまりにも表に出過ぎて、それがコミュニティの形成を妨げていないのでしょうか。

司会者ではないのに、私が勝手に問題提起してしまいました。答えがわからないので、教えていただければと思います。

川井：先ほど資本主義の話がありましたが、ご質問の問題も、成長時代につくられてきたものが結構あると思います。広い農地に山林も抱えるということになっていますから、それが今、飽和状態になっています。ですから、農地はもう完全に休耕地になってしまって、広ければ広いほど、次第にどこの所有ともわからず宙に浮いてしまいます。

山林などはもっとひどい状態です。どこが区分けかわからなくて、自治体が借り出そうにも借り出せないという状況で、手つかずになっているところもあります。ですから、その私有の問題は、今、かなり大きなテーマと

8 Friedrich Engels (1820~1895) ドイツの経済学者、哲学者、社会主義者。カール・マルクス (1818~1883) とともにマルクス主義を創設。

9 原タイトルは“Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats. (4. Aufl.)” 1884年に刊行。日本語訳はエンゲルス著、土屋保男訳『家族・私有財産・国家の起源』新日本出版社1999年など。



壇上で白熱した議論を展開するパネリスト
(左から中沢氏、西村氏、広井氏)

して、目の前に広がっていると思います。

西村：少しだけ付け加えますと、先ほど例を挙げられたように、実は今、かえって東京などの地価が高いところで先鋭化しています。そこをみんなで共同利用して、あるいは防災のためにみんなで共有の場所を持つとか……。

もっと言えば、隣の人が何をやっているのかわからないマンションで、一定時間でいいからコミュニティのコミュニケーションができる縁側などの場をつくったり、改造したりする必要ははっきりしているにもかかわらず、やはり「私の財産はいくらで売れる」となってしまう。ですから、そうしたほうが高く売れると言いたいくらい、都心部でさらに先鋭化しています。

川井：中沢先生、それについてひと言ございませんか。

中沢：土地私有の問題はものすごく大きい問題なので、この時間内ではちょっと話せないと思います。

こうした言い方が正しいかどうかわかりませんが、東京都で一番の大地主は天皇家、皇室です。別に私有しているわけではありませんが、都心部の最も広い土地で、最も先端的な利用をしていると思います。具体的には皇居と、関連した大きい土地に明治神宮があり

ます。明治神宮は神社庁ですが、皇室と深い関係があります。

これらの土地は、資本主義的な利用はされていません。千代田区の農民は1人で、天皇陛下だという話もあるほどです。昭和天皇から田植えを始めていますから、1人農民がいるわけです。

土地利用として明治神宮を考えると、ある意味で巨大な鎮守の森で、基本的に資本主義の原理が入ってこないようになっています。皇居も同様で、しかも森林をつくることが第一前提になっています。明治神宮の森は、明治時代の科学者が計算し尽くしてつくったものです。皇居の中の吹上御苑は、昭和天皇のご趣味で、あとは動植物に任せたといい不思議な土地利用がされています。

ほかの土地に関しては全部、小さい神社のスポットはいくつかあるものの、広い範囲に関しては売買可能になっています。売買可能になるということは、元の私有者の私有権を奪えるということです。そして何をするかというと、家あるいはマンションを建ててしまう。これは大都会で起こっていることですが、田舎へ行けば、耕作放棄地がある一方で、鉄道の線路に近いところでは住宅化されています。そうすると、それまでの所有者がそれを手放して、不動産屋が取得して、今度はそれを売っていくことになります。

この問題は、日本の今の最大の問題です。ただ、私有ということを捨ててしまっているのでしょうか。今のような社会で私有権を放棄したら、必ずそれを商品やお金に換えるというシステムがどっと侵入してきます。ですから私は、むしろ私有権を持って対抗したほうがいいと思いますが、その力が地方に十分でないというのが大きな問題だと思います。

私有の問題は日本の形成の問題で、先ほど

の「農民とは何か」という問題とも深く関わっていて、すごい問題提起だと思います。

また、深い研究が必要でしょうからひと言では言えませんが、私有の問題について、エンゲルスたちは「都市の労働者は、みんなが私有財産権を放棄して自分の労働力だけを持って都市に集まり、プロレタリアになって、この人たちがいずれ世界をつくっていく」という世界観を19世紀につくりました。ところが、これを20世紀に実現しようとして農村で何をやったかというところ、コルホーズをつくったり、人民公社をつくったりして、農民の私有権の一切を奪って、全部国有地にし、農民を労働者にしたわけです。この考え方が根本的に間違いだということは、もはや中国でもロシアでも立証済みです。

つまり、私有財産に関する19世紀の思想は、破たんしていると言えます。私有といわゆる公共の問題に関して、本当に深く考えなければいけないけれども、今の経済学でも哲学でもまだ放棄されているように思います。

6. 「国是」より「郡是」^{ぐんぜ}に

(1) コミュニティを良しとする発想＝「郡是」

中沢：また、コミュニティの問題についてですが、僕はこの間、京都府の綾部市というところから呼ばれてお話をしに行きました。綾部市は、いわゆる大本教¹⁰が発生したところ

です。同時に、ここにはグンゼという有名なアパレルメーカーがあります。元々は繊維製品の大きい工場が発生したところで、グンゼの工場は日本の資本主義の中でも特筆すべきシステムです。かなり古い時期から、労働者をい

わゆる賃金労働者として扱わないのです。女工の教育をはじめ、職工の福利厚生すべてを含め、綾部という町を一つの繊維産業を中心にした総合的・複合的な都市をつくろうとしたところなのです。そこで講演をしてきました。そのとき僕は次のようなことを考えました。

グンゼはストッキングの名前だと思っている方がいらっしゃるかもしれませんが、これは「郡是」という漢字なのです。「〇〇郡」の「郡」と「是非」の「是」を合わせた「郡是」という言葉で、創業者が自分の思想を名前に盛り込んだのです。つまり、「国是」ではないということです。当時は国是、あるいは私是、エゴの是だけで動いていく。この二つに両極端に分かれていたときに、「郡是」ということを言い出したわけです。つまり、コミュニティを良しとすることを第一方針としていくというシステムをつくったわけです。

そのための一つのモデルケースとして、「郡是」の工場をつくりました。これは、イギリスのロバート・オウエン¹¹という、社会主義の原型をつくったような人の工場をモデルにして、周辺部の農村と、農村部から供給されてくる労働力、この労働力として工場に集まってきた女工さんたちに高度教育を与え、保育システムをつくっていきました。それをやっていた会社がそこにあるのです。

僕はこの「郡是」という言葉が、非常に重要なのではないかと思うのです。「郡」という言葉は、コミュニティという言葉ですから、この言葉に関して、綾部の町はいろいろなことを考えたのです。

そして、郡是工場ではそのようなことを考

10 1892年に開教した教派神道。開祖は出口なお。

11 Robert Owen (1771～1858) イギリスの社会主義思想家、協同組合運動の思想的源流であり、「工場法」や社会保障などの創唱者でもある。(『新版 協同組合事典』)

えた一方で、大本教では少し違うことを考えたのです。世界には大きな屋根があって、その中で人間とほかの生物が共生していく大きい家なのだというイメージをつくり出していくわけです。郡是工場と大本教の二つが一体となって、綾部で展開されていきました。

(2) 資本主義と富本主義

中沢：資本主義がなぜ今のような形になっていったのか。資本主義の最初の頃は、皆さんもよくご存じのとおり、アダム・スミス¹²が『Wealth of Nations』¹³を書きました。この本は資本論の原型だと言われていますが、実はそうではありません。資本はCapitalですが、Wealth（富）と呼ばれているのです。この「富」という言葉が非常に重要で、しかも「郡是」と深く結びついていると思います。

漢字の「資」という字を思い浮かべてください。「次」の下に「貝」と書かれています。つまり、「次」の「貝」が「資」ですから、投資のことを指します。当時、貝は貨幣ですから、貨幣を投資して、次の貨幣という利潤を持って帰って来るといった意味が「資」だったわけです。ですから、資本主義の「資」は「次」の「貝」なのです。

ところが、「富」という漢字を見てみましょう。「富」は上が家の屋根です。中に口や田があります。それは酒瓶のことです。つまり、屋根の下でお酒を発酵させているという意味です。「良いお酒をたくさん醸している家は富がある」という中国の概念です。

屋根の下で発酵させるというのは自然過程で、微生物がやっています。農業の原型です。

発酵菌が農業をしているわけです。発酵菌が農業をしていて、そこから出てくるものがお酒です。米を通過してお酒までいきます。お酒までいくと、当時は最高の換金製品ですから、すぐお金に換えられます。つまり、「富」という字の中には、1次産業の大元になっている発酵菌から貨幣まで全部が入っています。それが大きい屋根に守られているというのが、「富」という概念です。

これに対して資本主義は、貝です。貝とは死んだ貝のことです。生命活動が終わった貝殻だけを取り出して貨幣にします。それは自分でたくさん保持することができますし、金に換えたりすればすぐ利用しやすいものになって、貨幣主義が発達するわけです。

この貨幣を元にした資本主義と、1次産業からお金にすぐ交換可能なお酒まで至るものを屋根、つまり「郡是」という屋根の下で行う産業というのは、大きな違いがあります。ですから、僕は資本主義に対抗するものとして、富本主義というものがあるのだと思います。

富本主義の「富」というのは、先ほどから話題になっている6次産業の考え方のバリエーションだと思います。お酒づくりはまさに6次産業なのです。田んぼでお米をつくって、それを発酵菌の働きによって分解してもらって、最終的にお酒という高度な価値物に転換していく。それが「富」だという考えを念頭に置いてみると、これを考えた中国人は相当なものだと思います。資本と富本を二つに分け、「富」のほうが重大なのです。

同時に、お金を使う商人たちの活動というものもあります。けれども、一つのコミュニ

12 Adam Smith (1723~1790) イギリスの経済学者、古典派経済学の祖。

13 原タイトルは“An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations (諸国民の富の性質と原因に関する研究)”で、1776年に刊行。日本語訳はアダム・スミス著、大河内一男監訳、玉野井芳郎、田添京二、大河内曉男訳『国富論』(全4巻)中央公論新社(中公クラシックス)2010年、など。

ティに生きる人間は「郡是」という大きい屋根の下に行って、お金を通じるとほかの世界へ広がっていくという構造になっていたのではないか。

今こうして、6次産業としてここで語られていることは、実はものすごく根深い思想を持っているものだと、私は考えます。

(3) 「腐るもの」が循環する経済

西村：ひと言だけ言わせてください。私はたまたま京都出身ですので。綾部と隣の福知山は京都府の中で最も出生率が高いのです。それはやはり、先ほど製造業が意外だったという話をしましたが、今ちょうど福利厚生費と出生率の関係を調べていて、データは取れないのですが、福利厚生をすごく大事にするグンゼというところでその可能性がある、お話を聞いて意を強くしました。

中沢：綾部の研究を一緒にしませんか。

西村：そうですね。広井先生にもぜひ、今のお話についてコメントをいただきたいですね。

広井：今の中沢先生のお話は非常に印象強く、感銘をもって伺いました。西村先生が出生率が高いという話もされたので、余計にリアリティをもって受け止めました。

連想したのは、2～3年前に出た『田舎のパン屋が見つけた「腐る経済」』¹⁴という本です。脱サラして岡山や鳥取の方でパンづくりを始めた若い人の本で、私は非常におもしろく読みました。中沢先生のお話とそのままつながるのですが、世の中にあるものはだいたい、農産物も含めて腐るのが当たり前で、それが循環していきます。やや単純化して言うと、世の中に腐らないものが一つだけあって、それが貨幣です。貨幣は腐らないどころか、



どんどん増えていく。この本では、本来の「腐るものが循環するような経済」のほうが、「腐らないものがどんどん大きくなっていく経済」よりも健全なのではないかという趣旨で書かれています。パン屋としての実践も踏まえた上での、しかも資本論も参照しながらの議論なので非常に説得力があるのですが、今この話とまさにつながってくると思いました。

希望を込めて言えば、先ほど内藤理事長が若い世代の話をされていましたが、彼らはわりと起業意識や社会貢献意識のようなものが高く、ソーシャルビジネスについても前向きです。私が前々から思っているのは、30代くらいの人まで含めて今の若い世代でソーシャルビジネスをやっている人たちの言っている内容の言葉が、実はというか奇しくもというか、渋沢栄一¹⁵など日本の資本主義の原型をつくった人たちが言っているような内容と非常にシンクロナイズしています。経済と倫理のようなものが、まったく別ものではなく、相重なるものだということです。

今この話を経済と倫理という角度から見ると、経済と倫理は元々、「三方良し」みたいなことも含めて、融合していたものが一旦切り離され、どんどん分離していった、それが今、

14 渡邊格『田舎のパン屋が見つけた「腐る経済」』講談社 2013年

15 渋沢栄一（1840～1931）実業家・社会事業家。第一国立銀行の設立に携わり、近代日本の実業界の基礎を築いた。

また結びつくような、そういう局面になっているのではないかと思います。「腐る経済」や循環ということともつながるかと思います。中沢先生のお話も、その点から見て改めて非常に考えさせられる、興味深い内容として受け止めました。

中沢：一つ付け足すと、なぜお米だったかという、お米は腐りにくいからです。それまでは芋でしたから。芋や栗はわりあい日持ちしますが、基本的に芋は腐ってしまうのです。僕は学生るとき、よく人類学の調査を見ましたが、ポリネシアの方の首長さんの財産は芋でした。芋小屋をつくって保存しているのですが、いっぱい集めれば集めるほど腐ってしまう。そうした難問がこの島の世界の矛盾であるという研究結果がありました。

なぜ、古代国家も封建国家も米を重視したかということ、お米は腐らない。しかもお米は酒に変わる。これは非常に重大な要因だったと思います。金は、残念ながら金でしかありません。しかし、お米は貨幣の機能も持ちながら、同時に発酵菌の働きを通じると6次産業に変容していきます。その意味では、かなりオールマイティなものとして愛好されたのだと思うのです。なぜ、日本人がこんなにお米に惹かれてきたかという原因はそれなのだろうと思います。

7. 1次産業が持つ価値

川井：ありがとうございます。最後のお話はかなり興味深く、本日のテーマにもすごく合致するところに来たと思います。中沢先生から「郡是」というお話があり、これは「国是」ではなく「郡是」だというお話がすごく印象的でした。これからのコミュニティづくりは、そのコミュニティにおける地域力・人間力というものの力強さが問われているのではない

かと思います。

また、人口が減少し高齢化していく町の中で、そこだけで踏ん張ってできるのかということ、やはり先ほどのオープン・クローズドの話も出てきますし、科学を利用するとか、ITも含めて外に開いていく、つながっていくという話も出てくるのではないかという気もしました。

それから、内藤理事長からラオスに行ったときの若い人たちの話がありましたが、これは中沢先生のお話ともつながるのではないかと思います。どうやら日本人という民族は、意外とアジア地域で交流できそうな人たちが分散してたくさんいそうだという気もしました。これについて中沢先生に振るとお話が長くなりそうですから、今回は振りませんが(笑)。

もう一つ言えることは、今、何かもやもやとした不信感と言いますか、国の中で起きている、たとえば憲法改正の問題や経済の問題なども全部そうなのですが、何となく上から下へと向かうベクトルの流れが全然変わっていないような気がします。別に政権批判をするつもりはないのですが、いささか逆戻りのような雰囲気も感じ取れます。「これからは高齢化して人口が減ってくるのだから、総活躍の時代をつくらなければいけない」みたいな話を聞くと、何かもう「年を取っても、とにかく稼げ」と言われているような気がしてくるのです。そうした虚しさのようなものが私の中にも何となく残っていました。

その点で、最後のお話の展開の中で「国是ではなく郡是なのだ」と言われたことは、今、まさに日本社会が問われていることそのものではないかという気がしています。ですから、下からの本当の民主主義の力によってこの国の将来像を、いかにデザインしていく

のかを考える時代が、まさに今、到来しているのだと感じられます。

そのためにも、さまざまなハードルがあり、世代間の意識の違いや、何か抵抗勢力になってしまうような壁もある、という状況であっても、私たちはそれを乗り越えていくような地道な活動を、実験的にでもいいから少しずついろいろなところで試していかなければいけないのではないかと思った次第です。ここで内藤理事長、ひと言お願いいたします。

内藤：今、6次産業化と言って、いろいろなところでさまざまな取り組みがされています。ただ、富の話や郡是の話を聞いていて思ったのですが、本当に身の丈に合った6次産業化ということを考えたとき、「自分たちは何のためにやっているのか」「何を信条に、何を是としてやっていくのか」をきちんと考えて6次産業化をすれば、その地域にしかないものが生まれますし、みんなが「すばらしい」と言って価値を認めてくれるのではないのでしょうか。これは単に食品メーカーをつかっていく話ではありません。ただ単に原材料を加工して、販売して、付加価値を付けられればいとなってしまうと、これはもう人まね・物まねに終わってしまって、誰もがすばらしいとは思いません。

そうすると、6次産業化の意味を本当に考えて、その富をつくる。「地域でいったい何があるのか」「地域の考え方はどうなのか」「今まで何をやってきたのか」ということをきちんと考えて6次産業化をすれば、ロットは非常に小さいかもしれないけれども、多くの人に評価される、感銘を受けるものができていて、成功するのではないか。今お話を伺っ

ていて、そう思いました。そうしたことを考えた上で、6次産業化をぜひやってもらいたいというのが希望です。

川井：私も今、いくつかの企業との研究会に顔を出していますが、正直言って、それはシェアードバリュー（共通価値）の研究なのです。シェアードバリューをつくり出すために何が必要かを議論していると、ネックとなるのは、やはり社会との関わりをいかに形成するか、という課題なのです。

そういう意味では、6次産業もまた1人で何から何までやる必要はないのではないと思えるのです。形態として一つのモノができる、あるいは一つのサービスが完成するとき、何人かの、場合によっては法人も違う人たちが絡み合いながら、一つの価値が生み出されていくという「高次元産業化」も、これから考えていかなければいけないのではないかと感じました。

では最後に、本日のインキュベーター役でもある中沢先生にひと言いただければと思います。

中沢：前々回のシンポジウム¹⁶でもお話ししましたが、なぜ農業・漁業・1次産業なのかということを考えてみると、先ほどは発酵菌のことを言いましたが、富というのは要するに、人間の世界の循環とは異なる、大きい循環の中で動いている世界があって、そこに接続回路をつくっていくことが大事です。

そうすると、今の資本主義の最大問題というのは、人間の世界で閉じてしまうことです。経済の世界で閉じてしまって、しかも今、その閉じている領域がものすごく狭く、お金という領域に狭まっています。そして、温暖化

16 平成25年度 JA 共済総研セミナー「自然と人間の協働による持続的な地域社会づくり」（平成26年3月12日開催）。講演録は『自然と人間の協働による持続的な地域社会づくり～食・自然エネルギー・ケアでつながる新たな生活基盤の可能性を探る～』（2014年10月発行）をご参照のこと。<http://www.jkri.or.jp/report/bet/201410.html>

が進む地球や人間の生命などの問題が、資本主義からは切られているということが重大な問題になっています。

今、資本主義がどちらに変わっていかねばいけないということを考えてみると、この人間化されない世界の中に通路をつくっていける資本主義、それが先ほど言った富本という考え方の一番のアイデアで、酵母菌がやっていたことです。それを人間がやろうとして、1次産業が担っていたわけです。しかし、いくらお百姓さんが頑張っても、天候不順が続いたり、蒔いた種が満足なものではなかったりすると、収量は上がりません。

いわば庭師さんと同じです。人間が自然に働きかけて、自然の生育を助けるという働きを行っているわけですから、農業者、漁業者というのはいつも、「自然」という大きなサイクル、広井さんのおっしゃる「自然」という概念に回路をつくっていく産業だから重大なものだと思います。

これは、1次産業以外にはできません。2次産業、3次産業と言われているものは、自然循環の中に自分を結びつけていくことができないわけです。資材・生産材料が現地から調達されて、工場に集まってくる2次産業。3次産業はその上に立って販売されるという形です。つまり、1次産業だけが人間の世界よりも大きい自然サイクルの中につながっていく回路をつくっています。ですから、富本ということを考えると、農業は一つのモデルになっていくだろうと僕は考えています。

僕がなぜ、JAの研究を一緒にやっているかと言うと、農業・漁業・林業はたいへん長期に羽振りが悪かったのですが、今後のことを考えると、人間にとって最も重要な産業の形態になるからです。今は、羽振りが悪くなった状態を何とか回復しようと思って6次産

業化を訴えています。6次産業の先にあるものを考えてみると、農業・漁業・林業の価値というものの再発見につながっていき、最初に言った「資本主義がどちらの方向へ向かっていかねばいけないか」ということの一つの回答ではないかと、僕は考えています。
川井：ありがとうございました。



会場風景

【パネリスト・プロフィール】

○広井 良典（ひろい よしのり）氏

1961年岡山市生まれ。専攻は公共政策及び科学哲学。東京大学教養学部（科学史・科学哲学専攻）卒業、同大学院修士課程修了後、厚生省勤務（1986年～96年）をへて96年より千葉大学法経学部助教授、2003年より2016年3月まで同教授。この間、2001年～02年マサチューセッツ工科大学客員研究員。2016年4月、京都大学こころの未来研究センター教授に就任。

社会保障、医療福祉、都市・地域等に関する政策研究から、ケア、死生観等に関する哲学的考察まで幅広い活動を行っている。『日本の社会保障』（岩波新書、1999年）でエコノミスト賞、『コミュニティを問いなおす』（ちくま新書、2009年）で大佛次郎論壇賞受賞。近著に『ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来』（岩波新書、2015年）。

○西村 周三（にしむら しゅうぞう）氏

1945年生まれ。経済学者。元京都大学副学長、京都大学名誉教授。専門は医療経済学。日本における同分野の草分けとして活躍し、医療経済学会初代学長を務める。

主な編著・共著書として『医療と福祉の経済システム』（筑摩書房）、『医療の経済分析』（東洋経済新報社）、『講座 医療経済学・政策学(1)医療経済学の基礎理論と論点』『講座 医療経済学・政策学(4)医療技術・医療薬品』（勁草書房）、『社会保障と経済(2)財政と所得補償』『社会保障と経済(3)社会サービスと地域』（東京大学出版会）、『超高齢社会と向き合う』（名古屋大学出版会）、『行動健康経済学—人はなぜ判断を誤るのか』（日本評論社）など多数。

また近年は、電子書籍による情報発信にも積極的に関わっており、主な電子書籍専用コンテンツとして、20代から70代までの6名の著名な作家をゲストに迎えた対談集「Dr. ジレ！」（出版社：デジタルアーカイブズ）などがある。

○中沢 新一（なかざわ しんいち）氏

1950年山梨県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。思想家、人類学者。著書に、『チベットのモーツァルト』、『森のバロック』、『東方的』（以上、講談社学術文庫）、『雪片曲線論』『野ウサギの走り』（以上、中公文庫）のほか、『芸術人類学』（みすず書房）、『カイエ・ソバージュ』、『アースダイバー』、『大阪アースダイバー』、『野生の科学』（以上、講談社）、『日本の大転換』（集英社新書）、『日本文学の大地』（角川学芸出版）など多数。